



アメリカの大学図書館におけるアウトリーチサービスの 変化とサービス内容に関する調査報告ーサブ ジェクトライブラリアンの能動性についてー

谷口, 由佳

(Citation)

大学図書館研究, 109:2006

(Issue Date)

2018-08-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

Creative Commons Non-Commercial license (CC-BY-NC)

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482700>



アメリカの大学図書館におけるアウトリーチサービスの 変化とサービス内容に関する調査報告 —サブジェクトライブラリアンの能動性について—

The report of recent progress of outreach services in American University Libraries:
Active programs by subject librarians

谷 口 由 佳¹

Yuka TANIGUCHI¹

抄録:2016年に訪日した UCF Libraries(セントラルフロリダ大学図書館, University of Central Florida Libraries)の研究情報サービス部長 Barbara Tierney 氏の講演を契機に, 国立大学図書館協会海外派遣事業の派遣先として UCF Libraries に滞在する機会を得た。利用者の学習・教育・研究により深く関わる支援が大学図書館に求められる現状を鑑み, アメリカで活動してきたサブジェクトライブラリアンが図書館外に出る「アウトリーチサービス」の変化とサービス内容はどのようなものか, 学習支援・教育支援・研究支援において具体的にどのような活動がなされ, 大学内においてどう位置付けられているのか, といった事項について調査を行った。

キーワード: セントラルフロリダ大学, 学習支援, 教育支援, 研究支援, 投資対効果, アウトリーチサービス, サブジェクトライブラリアン, 学術コミュニケーション

1. はじめに

UCF Libraries で研究情報サービス部長を務める Barbara Tierney 氏は, ラーニングコモンズに関する研究¹⁾で知られている。

Tierney 氏は2016年に訪日し, 平成27年度国立大学図書館協会シンポジウム²⁾, 神戸大学附属図書館ワークショップ³⁾でラーニングコモンズについての講演を行った。Tierney 氏は神戸大学において UCF のサブジェクトライブラリアンの働き方の変化, 特に「アウトリーチサービス」について紹介した。筆者が「アウトリーチサービス」に興味を抱いたため, Tierney 氏のご厚意で機会があれば訪問を受け入れていただけたことになった。

そして筆者は2017年9月17日から10月1日にかけて, 平成29年度国立大学図書館協会海外派遣事業の助成を受けた交流訪問者として UCF Libraries を訪問する機会を得た。派遣のテーマを「北米の大学図書館におけるアウトリーチサービスの実態調査」と設定し, UCF Libraries における学習・教育・研究支援について John C. Hitt Library のライブラリアンへのインタビュー調査および実際の業務見学を行った。

2. 訪問先

UCF Libraries は14の図書館・室で構成されている⁴⁾が, 今回の派遣では Tierney 氏が勤めるメインキャンパスの中央館, John C. Hitt Library でほとんどの時間を過ごした(この他, Tierney 氏のご厚意により Harriet F. Ginsburg Health Sciences Library, Curriculum Materials Center も見学している)。

UCF は1963年に創立され, 13のカレッジと学生約66,000名, 教員約2,500名を擁する大規模校⁵⁾である。フロリダ州にある州立総合大学の一つで, 国内有数の観光都市であるオーランドにメインキャンパス, 州内各地に遠隔キャンパスを構える。オンラインコースに力を入れており, 2018年には U.S. News & World Report 誌でトップクラスの評価⁶⁾を得ている。今回訪問した John C. Hitt Library は10のカレッジをサポートするメインキャンパスの中央館であった⁷⁾。

全館で冊子体約155万冊, 電子体約15万冊の蔵書を有し, 雑誌は冊子体で約700タイトル, 電子体で約7万タイトルを契約している⁸⁾。キャンパス内の学習スペースが少ないことから特に2階ナレッジコモンズの利用が多く, 現在進行している「21世紀図

書館計画」でも自動化書庫への移動と学習スペース拡張が骨子とされている⁹⁾。

Tierney 氏によれば図書館に勤務するのはフルタイムライブラリアン 45 名、フルタイムスタッフ 70 名、パートタイム学生アシスタント 95 名¹⁰⁾であり、大学の規模に比してかなり少人数の体制である。この人数の下でのアウトリーチサービスは、貸出返却 (Circulation) を独立した部署の担当業務としてサブジェクトライブラリアンから切り離す人員配置や、オンラインサービスの拡充によって可能となっている。



写真 1 John C. Hitt Library の外観

3. 調査テーマとその結果

John C. Hitt Library の各部署のヘッド 10 名、サブジェクトライブラリアン 8 名にインタビュー調査を行い、実際の業務 (ガイダンス, 個人面談, Ask A Librarian, レファレンスカウンター対応, ヘッドカンファレンス) 見学を行った。

帰国後も, Barbara Tierney 氏にメールによるインタビューを行った。

3.1 アウトリーチサービスの定義

図書館界で言う「アウトリーチサービス」はアメリカで公共図書館のサービスとして始まり, 日本にも同じ概念が輸入された。日本で元の語義が定着する一方, アメリカでは「アウトリーチ」の主体や対象, 捉え方に変遷が生じている。

以下にその流れを概観する。

3.1.1 従来のアウトリーチ

アメリカにおける図書館用語としての「アウトリーチサービス」は 1960 年代から, 公民権運動や工業化に伴う非英語話者の都市への進出に対応して使用されはじめた。元々の意味としては, 図書館サービスを圏域内にいながら届いていなかった特定の利用者層に拡充する活動を指している。主な対象として

想定されていたのは移民, 非英語話者, 非識字者, 受刑者, 低所得者などである¹¹⁾。

日本の図書館においても「アウトリーチサービス」の定義は受け継がれ, 各種言語で書かれた図書の提供, 身体障害者を対象とした図書の郵送・宅配サービス, 病院や高齢者施設への出張サービスが実施されてきた。これらの使用例は主に公共図書館において語られ, 大学図書館で用いられる場合も「特定の利用者層に拡充する」点に変わりはない。

3.1.2 UCFにおけるアウトリーチ

それから 2006 年に久松によって, アメリカではアウトリーチサービスの主体が公共図書館から大学図書館に動き, 「おもにマイノリティの学生に対するサービス」として提供されていると報告されている¹²⁾。

Tierney 氏によると現在はそれよりさらに進んで, アメリカの学術図書館においては対面でない, あるいは図書館外で提供されるサービスを広く「アウトリーチサービス」と呼ぶことが一般化しているとのことであった。同趣旨で「outreach」を用いた例も見られる¹³⁾。

UCF Libraries における「アウトリーチサービス」はサブジェクトライブラリアンが担当し, 「ライブラリアンが建物を出て直に教育・研究の現場でサービスすること」と定義されていた。「建物を出て」と言ってもオフィスを図書館外の学部棟などに構えるライブラリアンはごく一部で, その点で鎌田の言う「エンベディッドライブラリアン」とはやや異なっている¹⁴⁾。

オンラインリソースによる支援もアウトリーチサービスの一つと位置付けており, 物理的な活動拠点の移動よりも利用者の活動に対して統合を図る能動的な姿勢 (Reactive to Proactive) を指して「アウトリーチ」と称しているとのことであった。

3.1.3 UCFにおけるサブジェクトライブラリアン

アウトリーチサービスの担い手であるサブジェクトライブラリアンについても述べる。まず UCF における図書館の位置付けだが, 組織上部から副学長兼 CIO (最高情報責任者) Joel Hartman 氏—図書館長 Barry Baker 氏—副館長の Penny Beile 氏—Tierney 氏などの部長—各部署のライブラリアンとなっている。

サブジェクトライブラリアンはそれぞれ特定の主題分野を担当するが, かなり広い範囲を受け持っている。たとえば担当分野が特に多いライブラリアンは 170 余りのオンラインリサーチガイドを手掛けているが, 内容は工学, IoT (Internet of Things), 法学ライティング, 演劇学, ジャーナリズム, 気象学ま

で多岐に亘っている。

そのためライブラリアンが元々バックグラウンドを持たない分野を担当することもあるが、専門分野における知識や能力を研鑽する機会は確保されている。特に今回見学する機会が多かったのは、Tierney氏が統括する研究情報サービス部門のサブジェクトライブラリアンの取り組みであった。

「サブジェクトライブラリアン」の定義は日本でも多様に捉えられてきたが、アメリカの大学図書館においても厳密な用語の定義が共有されているわけではないようである。たとえばUCFにおけるサブジェクトライブラリアンはルイジアナ州立大学の「リエゾンライブラリアン」と同義と見なされ¹⁵⁾、UCFにおけるサブジェクトライブラリアンは提供するサービスによって「エンベディッドライブラリアン」「エンゲージドライブラリアン」を自称することもあった。

3.2 UCFにおける実際の取り組み

インタビューを経て、城の調査の通りアメリカでの雇用においては職務記述書(Job Description)と呼ばれる文書によって被用者に求める職責や資質を明文化し、業績評価の基準としても用いる慣行が一般化していることが分かった¹⁶⁾。UCFではこれをPosition Descriptionと称し、アウトリーチサービスを担うサブジェクトライブラリアンの職責および年間評価指標を「Annual Assignment and Position Description (AAPD)」という文書に纏めている。

AAPDの一例より、サブジェクトライブラリアンの担当分野における具体的な職責を以下に挙げる。

表1 AAPDにおける職責の一覧

% of Effort		Duties & Responsibilities
65% (26 hours)		Reference Services
	45% (18 hours)	Subject Librarian Outreach
	15% (6 hours)	Reference and Information Desk
	5% (2 hours)	Ask A Librarian
10% (4 hours)		Library Instruction / Information Literacy
15% (6 hours)		Collection Development
5% (2 hours)		Scholarship and Professional Development
5% (2 hours)		Service

勤務時間の65%(週26時間)をレファレンスサービスに充てるよう定められており、その大部分を占めるのは45%(週18時間)のアウトリーチサービスである。

AAPDに列挙されているアウトリーチサービスは以下の通りである。

Attend academic department and college meetings.

(Departmentの会議への出席)

Meet one-on-one with undergraduate and graduate program coordinators in assigned areas, library representatives, and individual faculty members.

(Departmentの事務長から指名された教員(Academic department representative)や図書館担当教員、個々の教員との個別面談)

Offer individual consultations and small group workshops to assist students and faculty with research projects, research strategies, assignment development, or database/resource training.

(学生や教員を対象とした、研究プロジェクトや研究戦略、課題達成、データベースや情報源利用に関するトレーニングを行う個別相談や少人数ワークショップ)

Create and disseminate customized library electronic newsletters, electronic postcards, web-based research guides, etc. to faculty and students.

(学生や教員の専門に特化したeニュースレター、オンラインリサーチガイドの作成と広報)

Profile your assigned academic departments to inform outreach activities, instruction, consultations and collection development.

(アウトリーチ活動、インストラクション、個別相談、蔵書構築について広報するための担当Departmentの概略整理)

Work to increase relevance and expertise in subject specific research competencies by mapping the curriculum of each assigned academic program in order to achieve the following three outcomes.

(以下の3つの成果を達成するための、担当分野における各プログラムのカリキュラムマッピングによる、特化した研究能力の関連性と専門性の向上)

(1) Outreach to Honors-in-the-Major students in

assigned subject areas to inform them of relevant library resources and services.

(担当分野の待生への図書館の情報資源、サービス紹介)

(2) Outreach to faculty and students in assigned subject areas to encourage their participation in STARS (the Libraries' Digital Repository)

(担当分野の教員や学生に機関リポジトリ STARS への参加を呼びかけるためのアウトリーチ)

(3) Scholarly Communication outreach to faculty and students in assigned subject areas (with training and assistance from the UCF Scholarly Communication Librarian).

(学術コミュニケーション担当ライブラリアンによる訓練と支援を前提として、担当分野の教員や学生に向けた学術コミュニケーションに関するアウトリーチ)

なお、個別相談の対象は学生や教員だけではなく、図書館との連携のために Department の事務長から指名された教員も含まれ、その教員と協働して蔵書構築を行ったり、図書館のインストラクションが学部生のカリキュラムに確実に組み込まれるよう全学部生 / 院生のカリキュラム・講義をコーディネートする教員(Faculty undergraduate / graduate coordinator)に働きかけたりしている。

3.2.1 カリキュラムへの関わり

UCF では図書館が大学におけるカリキュラム決定に際して一定の役割を果たしている。

Department ごとに定められるカリキュラムが国および地域の認証機関の基準を満たすかチェックする際に、サブジェクトライブラリアンが「そのカリキュラムにおいて有用な図書館の情報資源およびサービス」を分析した報告書が参照される。

また、ライブラリアン(Library faculty)と教員(Academic faculty)は、福留の紹介する大学評議会(Faculty Senate)¹⁷⁾をはじめとして大学の基幹部分を構成するほとんどの内部組織で協働しており、例外は Department の教員のみで組織される教授会である。Tierney 氏によればこれはアメリカの大学に広く見られる傾向であるようだ。そのため、UCF においても図書館が大学の中で一定の地位を占め、カリキュラムを把握しやすい環境にある。

3.2.2 学習支援・教育支援

カリキュラム制定に深く関与している前提条件の下で、ライブラリアンが情報リテラシーモジュール

や主題分野に沿ったオンラインリサーチガイドを作成して講義での利用に供し、実際に教員に促されて単位取得に利用する学生が多数を占めるとのことであった。情報リテラシーモジュールは APA, MLA などに沿った引用の方法や剽窃防止のような「形式を守る」内容だけでなく、文献レビューやウェブサイト評価のような「批判的に情報源を評価する」ことも含んでおり、この部分の教育が日本では弱いのではないかと省みさせられた。

オンラインコースに注力している UCF では毎年約 80%の学生がオンラインまたはブレンディッドコース(オンライン・オフライン混合型の講義形態)を受講し、約 32%の学生がオンラインのみで単位を取得している¹⁸⁾。

そうした状況に合わせて、ライブラリアンはリサーチガイドやサービス紹介動画など豊富なオンラインコンテンツをウェブサイトで提供している。学習・教育支援だけでなく教員に向けた引用管理ソフトウェアや著作権の説明においても同じ方法が取られ、UCF のサブジェクトライブラリアンはオンラインに「埋め込まれている」エンベディッドライブラリアンも自称していた。

講義棟(Classroom)に出張して、あるいは図書館内での対面サービスとしてワークショップやインストラクションも頻繁に開催され、現地では院生の個別相談と学部生向けのワークショップを見学させていただいた。いずれもサービスの説明から入るのではなく、まず学生が抱える課題や疑問を引き出し、その疑問をどの情報資源をどう用いて解決するかという視点からサービス紹介に繋げていたことが印象的で、ニーズから出発する課題解決型の方法が奏功してか学生の意欲や集中力も高かった。

その他にレファレンスカウンターでの業務も見せていただいたが、総じて利用者がライブラリアンに話しかけることに躊躇いがなく、質問のほとんどが館内の案内や基本的な資料検索などの簡単なものであった。それはレファレンスの統計にも表れており、統計は文書資料室によって管理されていた。利用者から専門的なサポートを求められるにはライブラリアンが専門的知識を有するだけでなく、日常的に信頼関係を培っていることも重要であろうか。

3.2.3 研究支援

研究支援としては、まず学術コミュニケーション支援グループの取り組みが挙げられる。このグループは研究ライフサイクルにおける図書館の 8 つの役割(引用メトリクス、文献レビュー、引用管理ツール、データ管理計画、研究データセットのメタデー

タ、文献調査サポート、オープンアクセスホスティング、メタデータサービス)を定め、どの過程でどのようにライブラリアンが助けられるかウェブサイトにて図式化して案内し、各役割に沿って学術コミュニケーション支援グループからの研修を受けたサブジェクトライブラリアンがオンラインリサーチガイドやワークショップ、ウェビナー(オンラインセミナー)を提供している¹⁹⁾。

この図式においても「図書館でこういったサービスを提供しているか」という視点ではなく、まず研究ライフサイクル全体を俯瞰し、各プロセスをサポートする学内組織の一つとして図書館が位置付けられる。図1における青い「Libraries」アイコンで、図書館がサポートできる段階と内容を示している。

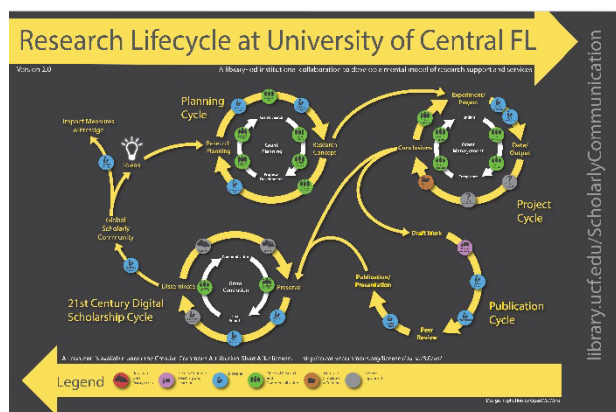


図1 学術コミュニケーション支援グループによる研究ライフサイクルの図式²⁰⁾

サブジェクトライブラリアンが担当分野に沿って作成したeニュースレターや情報源・サービス・イベントなどを紹介するメールも定期的に送られ、博士研究員や研究助手も含めて専門に特化した情報が提供される。

また、図書館が開催するワークショップは文献レビューや引用ツール、著作権などに関するものも多いが、特に出版社・データベース提供元の製品説明は教員からの要望が大きい。ライブラリアンがデータベースの利用を実演したり、教員が講義や課題におけるデータベースの使用例を紹介したりすることもある。これらのワークショップやインストラクションの参加者はオンラインアンケートによるフィードバックを行い、これはライブラリアンの人事評価にも関わってくる。

3.2.4 学内他組織との連携

UCF Librariesは、学内における他組織とも様々な形で連携を図っている。たとえばUCFにおける学生

へのライティング指導は主にUWC(University Writing Center)のピアチューターが担当し、ライブラリアンはリサーチスキルや情報リテラシースキルを教えるという協力体制が築かれている。

学士課程学生による研究をサポートするOUR(Office of Undergraduate Research)は講義におけるハイインパクトプラクティス(教室外体験プログラムや能動的学習により学生に高いインパクトを与える実践教育)などの手法を教員に勧めており、OURに招かれたライブラリアンも教員に講義の再設計や学生に課す課題の見直しを手伝うことを申し出ている。そこからオンラインリサーチガイドやインストラクションを介して講義に関わっていくとのことである。SDES(Student Development and Enrollment Services)は健康面、経済面、法律面など学生生活全般のサポートをする組織の集合である。障害を持つ学生へのサービス、編入学生へのサービス、初年次教育などその中の多くのユニットに、図書館とのリエゾンを担う「エンゲージドライブラリアン」としてサブジェクトライブラリアンが割り当てられている。

近時の例では特許・商標を専門とするサブジェクトライブラリアンであるMissy Murphey氏が障害を持つ学生を支援する学内機関OSA(Office of Student Accessibility)の職員に、John C. Hitt Libraryの改修によってアクセスが確保される施設や情報資源の説明を行っている。これは2016-2017年のUCF Libraries年次報告で参照できる通りである²¹⁾。

3.2.5 学外他組織との連携

公立図書館と異なり同じ機関の構成員を主たるサービス対象とする大学図書館の性質上、大学外への「アウトリーチ」について日本と異なる例を挙げるのは困難である。そのような状況ではあるが、UCF、あるいはフロリダ州に特徴的であると思われる例をいくつか紹介したい。

物理的な移動を伴うわけではなくAAPDでもアウトリーチサービスとは別枠と位置付けられているが、「アウトリーチ」の性質を持つサービスにAsk A Librarianが挙げられる。これはフロリダ州の図書館が協力して提供するオンラインレファレンスサービスで、UCFもその一角を担っている²²⁾。

UCFではAsk A Librarianを担当するライブラリアンは、週に数回、一定の時間帯を質問の待機と回答に充てていた。

回答の様子を見学させていただいたところ、質問は主にチャットソフトで提出され、3.2.2に示したレファレンスカウンターでの傾向と同じくUCFの学

生による蔵書検索など簡易な質問がほとんどであった。稀にある専門的な質問はサブジェクトライブラリアンに繋がれるとのことである。自分の大学の OPAC を検索するより Ask A Librarian で尋ねた方が早い、と示すような利用者行動からはサービスの高いアクセシビリティや信頼性がうかがわれ、その場の回答だけでなく後々に繋がる情報リテラシーの涵養に対しても一定の役割を担っていることが分かった。

他には他大学のライブラリアンを招いてワークショップを主催し、そのプログラムに大学出版会や学術情報ベンダーのデータベース紹介が組み込まれることもある。また、図書や雑誌論文を共同執筆する、共同の研究成果を学外の会議で発表する、といった活動も挙げられる。

3.2.6 サブジェクトライブラリアンの特徴

サブジェクトライブラリアンの「アウトリーチ」の一環として学内イベントに参加したり教員のオフィスを訪問したりしてサービスを広報する活動も行われていたが、こうした動きを可能にする理由の一つとして、教員のように個々人がオフィスを持ち勤務時間を自分で管理できる体制が挙げられる。

また、日本でも度々話題とされてきた、サブジェクトライブラリアンが専門知を身につける方法についても Tierney 氏よりご紹介いただいた。

UCF のサブジェクトライブラリアンは担当分野について雑誌や専門書を読んだり Department のセミナーやプログラムに参加したりする以外に、学外で行われる専門会議への出席や専門家で構成されるリストサーバへの登録も行っている。

さらに、UCF の講義をセメスターごとに 2 科目、無料で受講することができる。この制度でバググラウンドを持たない分野についても学べるほか、既にある学位に加えて新たな知見を取り入れることができる。たとえば経済・財政が専門のライブラリアンが経理の修士号も取得したり、ビジネスライブラリアンが GIS (地理情報システム) の科目を履修して経営分野の指導に GIS コンポーネントを取り入れられるようになったりしたことが例として挙げられる。

サブジェクトライブラリアンの特性としては専門知だけでなく、図書館サービスとサービス担当者自身の一体的な広報も挙げられる。図書館ウェブサイトでは全ライブラリアンが顔写真とともに紹介され、取得した学位や専門分野、作成したオンラインリサーチガイドなどが一覧できる。分野ごとに図書館サービスを案内するリーフレットでも、ライブラリアン

ンが顔写真付きで紹介されている。

ただウェブサイトにおけるライブラリアン紹介は UCF Libraries 独自の取り組みではなく、イェール大学のようなアメリカにおける他の大学図書館でも実施されている²³⁾。

日本における例としては、蔵書構築や学習相談に関わる教員をサブジェクトライブラリアンと称する金沢工業大学²⁴⁾や、クラスライブラリアン制度を導入している小樽商科大学²⁵⁾などが挙げられる。



図2 経営分野の図書館リーフレット

3.3 ライブラリアンと図書館サービスの評価

ライブラリアンの評価は AAPD の項目の具体的な達成度・達成状況に基づいて、年単位または月単位で実施される。図書館全体の評価に当たっては大学における RoI (投資対効果, Return on Investment) が基準とされているため、RoI の向上はサブジェクトライブラリアンの重要な使命として位置付けられている²⁶⁾。

その数値的な指標として、2014 年からの研究では図書館サービスを利用する学生の成績(GPA)に対する貢献度が採用されている²⁷⁾。これは「学生の成功に責任を持つ」という大学全体の方針にも沿うもので、この研究や Tierney 氏へのインタビューにより、実際に図書館サービスのユーザーはノンユーザーに比べて高い成績を収めることが実証されている。

4. 研修を終えて

今回見学したライブラリアンの「アウトリーチサービス」においては、学内で図書館が一定の地位を占めている、ライブラリアンが Faculty の身分と専門知を有している、基本的に人事異動がなく同じ専門分野に継続的な関わりを持てる、といった前提が有利に働いており、制度が違う日本での直接の導入は困難であると改めて思われた。日本にサブジェク

トライブラリアンの概念が紹介されてから数十年にわたって導入の困難さが訴えられてきたのは、こうした違いがネックとなっている。

国や大学の単位でそのような体制を変えるのは困難だが、専門的なサポートができない可能性を危惧する前に簡単な質問を気軽に受けられる関係を構築する、学内他組織との接点の薄さを問題とするのであれば大学組織の在り方を学ぶ、専門知が要求されるサービス提供のために図書館員が学ぶ機会を確保する、といったサービスの前段階を、個人の努力に依らず図書館全体として重んじることには一定の意義があると考え。その上で自分が勤務する大学、図書館の実情を検討することで、利用者とより密接で持続可能性のある図書館サービスに繋がられるのではないだろうか。

また、様々なライブラリアンから聞いた「図書館ありきではなくまず利用者のニーズや行動の把握から出発する」「アウトリーチの本質は自分の顔とサービスを一体的に覚えてもらう広報である」「大学職員として学生のために行動するに当たって、図書館や図書館資料に関連しているかどうかにかかわる必要はない」「人寄せでしかないと言われるイベントでも、それを契機に図書館に興味を示してくればサービスに繋がれる」といった発想にもそれぞれ学ぶところがある。

何より驚かされたのは、アメリカ、UCF にあってもライブラリアンが「図書館は何もしなければ忘れてしまう」という危機感を抱いていたことである。また、新任者へのリサーチガイドの引き継ぎや教員への紹介などは業務ではなく個々のライブラリアンの自発性に依っており、組織内部での連帯やサービス継続については日本の大学図書館を参考にしてもらえる部分もあるのではないかと感じられた。このことは研究支援の面からの図書館評価についても言える。

在りようは違っても志や使命は同じである図書館同士として、今回および次回以降の派遣が双方の課題解決に繋がる継続的な交流を生むことを期待したい。

5. 謝辞

まずは今回の研修で John C. Hitt Library に迎え入れてくださり、準備段階から帰国後まで親身にサポートくださった Barbara Tierney 氏に心より御礼申し上げます。また、親身に接してくださった John C. Hitt Library をはじめとする UCF Libraries の皆様にも深く感謝申し上げます。研修直前にフロリダ州を見舞った二つのハリケーンによってライブラリア

ンの業務にも大幅に変更が生じる中、こちらの拙い英語に熱心に、また懇切丁寧にお答えいただき非常に助かりました。

さらに国立大学図書館協会海外派遣事業を担当された皆様には貴重な渡航の機会をいただき、過去に派遣された皆様からも様々な点でご指導、ご教示いただきましたことに篤く御礼申し上げます。そして神戸大学附属図書館の皆様には快く送り出していただき感謝いたします。この研修を支えてくださった全ての皆さまに、心より御礼を申し上げます。

参考文献

- 1) Beagle, R. Donald, Bailey, R. Donald, Tierney, Barbara. The Information Commons Handbook. New York, Neal-Schumann, 2006, p.247, ISBN 978-1555705626
- 2) 国立大学図書館協会. “平成 27 年度国立大学図書館協会シンポジウム実施要項”. <http://www.janul.jp/j/operations/symposia/2015/symp2015.html>, (参照 2018-2-12).
- 3) 神戸大学. “(5)国際連携”. 平成 27 年度神戸大学附属図書館年次報告. <https://lib.kobe-u.ac.jp/files/overview/27report.pdf>, (参照 2018-2-12).
- 4) UCF Libraries. “Libraries”. <https://library.ucf.edu/about/libraries/>, (accessed 2018-2-12).
- 5) University of Central Florida. “UCF Facts 2017-2018”. <https://www.ucf.edu/about-ucf/facts/>, (accessed 2018-2-12).
- 6) University of Central Florida. “UCF Online”. <https://www.ucf.edu/online/>, (accessed 2018-2-12).
- 7) UCF Libraries. “John C. Hitt Library”. <https://library.ucf.edu/about/libraries/john-c-hitt-library/>, (accessed 2018-2-12).
- 8) UCF Libraries. “2016-2017 Statistical Summary”. <https://library.ucf.edu/about/departments/administration/facts-figures/statistical-summary/>, (accessed 2018-2-12).
- 9) UCF Libraries. “21st Century Library”. <https://library.ucf.edu/21st/>, (accessed 2018-2-12).
- 10) UCF Libraries. “Staff Directory”. <https://library.ucf.edu/staff/>, (accessed 2018-2-12).
- 11) 図書館問題研究会. 図書館用語辞典. 東京, 角川書店, 1982, p.1, ISBN4040310004
- 12) 久松薫子. 図書館自主研修グループ報告 大学図書館のアウトリーチサービス: 外国人利用者サービスの向上に向けて. 図書の譜. 2006, vol.10, p.159-169.

- 13) Anderson, Lisa, Bull, Stephen. The creation of a university library outreach programme to develop the information literacy of further education students : an interactive approach to support transition. *Journal of Information Literacy*. 2014, vo.8, no.1, p.42-57.
- 14) 鎌田均. エンベディッド・ライブラリアンにみる図書館環境の変化. *情報の科学と技術*. 2018, vol.68, no.1, p.14-18.
- 15) Tierney, Barbara, Kuyper-Rushing, J. Lois. A Tale of Two Liaison Programs: University of Central Florida Libraries & Louisiana State University Libraries Partnering for Subject Librarian Excellence. *Charleston Conference*. 2016, p.384-388. <https://docs.lib.purdue.edu/charleston/2016/prodev/2/>, (accessed 2018-7-19).
- 16) 城恭子. アメリカ大学図書館における学習支援担当者に求められるスキルおよびステークホルダーとの協働事例に関する調査報告. *大学図書館研究*. 2017, vol.106, p.71-81.
- 17) 福留東土. アメリカの大学評議会と共同統治 : カリフォルニア大学の事例 <論考>. *大学論集*. 2013, vol.44, p.49-64, <http://doi.org/10.15027/36509>, (参照 2018-7-19).
- 18) Cole, Laura J. "UCF Online Undergraduate Programs Named Top 20 in Nation". *U CF Today*. <https://today.ucf.edu/u-s-news-ranks-ucf-online-top-20/>, (accessed 2018-2-12).
Arthur, Michael, Tierney, G. Barbara. Subject Librarian Initiative at the University of Central Florida Libraries: Collaboration Amongst Research and Information Services, Acquisitions and Collection Services, and the Office of Scholarly Communication. *Charleston Conference*. 2013, p.486-491. <https://docs.lib.purdue.edu/charleston/2013/Communication/3/>, (accessed 2018-2-12).
- 19) UCF Libraries. "Scholarly Communication". <https://library.ucf.edu/about/departments/scholarly-communication/>, (accessed 2018-2-12).
- 20) University Libraries. University of Central Florida Libraries, Annual Report 2016-2017. 2017, p.60. <http://stars.library.ucf.edu/lib-annualreports/>, (accessed 2018-2-12).
- 21) Florida Electronic Library. "AskALibrarian.org". askalibrarian.org. <https://askalibrarian.org/>, (accessed 2018-2-12).
- 22) Yale University Library. "Yale College Personal Librarian Program". <https://web.library.yale.edu/pl>, (accessed 2018-2-12).
- 23) 金沢工業大学ライブラリーセンター. "SL 紹介". http://www.kanazawa-it.ac.jp/kitlc/about/sl_list.html, (参照 2018-2-12).
- 24) 小樽商科大学附属図書館. "クラスライブラリアンについて". <http://www.otaru-uc.ac.jp/htosyo1/CL/cl.html>, (参照 2018-2-12).
- 25) UCF Libraries. "Subject Librarian Toolkit". <http://guides.ucf.edu/subject-librarian-toolkit>, (accessed 2018-2-12).
- 26) Beile, Penny. "The Academic Library's (Potential) Contribution to the Learning Analytics Landscape". *EDUCAUSE review*. <https://er.educause.edu/blogs/2017/11/the-academic-librarys-potential-contribution-to-the-learning-analytics-landscape>, (accessed 2018-2-12).

<2018.8.24 受理>

1 たにぐち ゆか 神戸大学附属図書館情報サービス課総合・国際文化学情報サービス係